

失敗体験は 親子の成長のカギ

親は子どもの成長を願い、つい余計に口や手を出してしまいます。しかしそれが、子どものみずから成長しようとする芽を摘んでしまうことにもなりかねません。親は子どもが失敗したとき、その失敗体験をどのようにとらえ、どう接していけばよいのでしょうか。



陽一くんの宿題

「ただいまー、帰ったよ」

金曜日の夜、竹田康夫さん（37歳）が仕事から帰ると、妻の弘子さん（35歳）と陽一くん（小三）の姿が見えません。二人ともすでに夕食は済んでいるようです。

もう一度、大きな声で帰宅を告げると、弘子さんが陽一くんの部屋から出てきました。

「お帰りなさい。ごめんなさい、気がつかなくて。今、陽一を叱っていたところなの……」

そう言いながら弘子さんは康夫さんの食事の準備を始めました。

「陽一、どうかしたの？」

「工作の宿題がうまくできないって、ふてくされて泣いているの。針金で乗り物を作って学校に持って行くんですけど。『失敗したって、そのまま持って行けばいいじゃないの』って言い聞かせていたのよ」

康夫さんが様子を見に行くと、陽一くんは机に向かつてうなだれて座っています。

「どうした、陽一。工作がうまくいかなかったんだって？」

顔をのぞき込むと、陽一くんは目に涙



を浮かべたまま、黙だまつてうなずきました。

「何を作っていたんだ？」

「……ロープウエー……」

「そうか、ロープウエーか……」

「でも、ぼく失敗しちゃった……。どうしてもうまく出来なくって」

陽一くんはポツリと言いました。

机の上には作りかけの四角い箱のようなものがあります。よく見ると、それはロープウエーのゴンドラでした。陽一くんの話では、今日の図画工作の授業は、針金を使って自分の好きな乗り物を作る

時間だったそうです。そこ

で、陽一くんは夏休みに家

族で行った谷川岳たにかがわだけのロープ

ウエーが忘れられず、それ

を作ろうと思ったのです。

ところが、ゴンドラをつるすための支柱とロープの部分が、どうしても作れず、家を持って帰ってきたのでした。

「よし、待つてろ。今、ご飯を食べたら、お父さんが手伝ってやるからな」

そう言うと、康夫さんは陽一くんの肩を優しく叩きました。

いつの間にか陽一くんの部屋に入ってきていた弘子さんが、康夫さんの言葉聞いて言いました。

「いいのよ、放っておいてやって。ちよつと失敗するとすぐに泣くんだから。自分の宿題なんだから自分でなんとかしなくっちゃだめよ」

「まあ、そう言うなつて。ぼくに任せろよ。格好いいのを作つて、陽一を喜ばせてやるから」



康夫さんはそう言うと、台所に戻り夕食を食べ始めました。

お父さんの手助け

小さいころから物を作るのが得意だった康夫さんは、とても器用です。今でも、日曜大工や模型作りを趣味にしている、陽一くんの夏休みの工作や今回のような宿題は、いつも手を貸してきました。陽一くんを作る喜びや達成感を味わわせて、自信をつけさせたからです。

康夫さんは食事を済ませると、早速、居間で陽一くんといっしょに宿題にとりかかりました。

「あのな、陽一。ご飯を食べながら考えたんだけど、針金細工でロープウエーを作るのは難しいよ。自転車にしよう、自

転車。な、陽一。それなら簡単に作れるから」

そう言うと康夫さんは針金をペンチで切りはじめました。陽一くんの気持ちをよそに、康夫さんは作業を強引に進めていきました。

「いいか陽一、これが車輪になるんだ、そしてこれがハンドル」

陽一くんは康夫さんに教わりながら、針金の部品を曲げたりつなげたりしますが、いまひとつ乗り気ではないようです。「そうじゃないよ、陽一。そこはこうするんだ。ペンチを貸してみろ」



黙って見ていられず、すぐに手を出し
まう康夫さんです。

自転車は二時間ほどで出来上がりましたが、結局ほとんども康夫さんが作って
しまいました。

「よし、完成したぞ。どうだ、こっち
のほうがいいだろう？」

完成した針金の自転車を手に、康夫
さんは満足そうに言いました。しかし、小
学三年生の作品にしては、少し出来すぎ
のようです。

そんな二人の様子をじつと見ていた弘
子さんが、思わず口をはさみました。

「これじゃ、陽一の宿題にならないん
じゃないの」

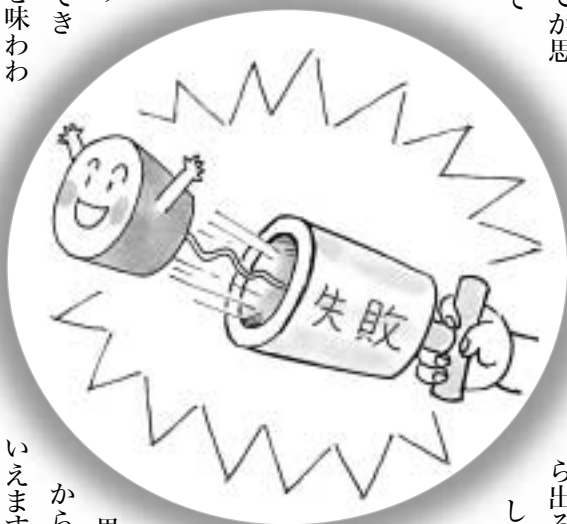
その言葉を聞いて、陽一くんは小さな
肩かたを落として、

「だって、ぼく、ロープウエーを作るの
を失敗したんだもの……」

と言いました。その視線は机しぜんの片隅かたすみに追
いやられた作りかけのロープウエーに注
がれていました。

私たちが何か物事を成し遂げようとす
るとき、障害や困難を乗り越えていく力
が必要です。すべてが思
い通りに進むわけ
はなく、事の大小
にかかわらず失
敗や挫折を経験
することがあり
ます。それは子
どもの場合でも
同様です。

しかし、幼い子
どもが何か試みよう
とするとき、親はでき
れば達成感や喜びを味わわ
せたい、失敗させたくないという思いか
ら、康夫さんのように、つい必要以上に



手を出しすぎたりすることがあります。
これもわが子がかわいいと思う親心か
ら出る行為なのでしょう。

しかし、場合によつて
は、子どもがみずか
ら成長しようとい
う芽を摘んでし
まうことにもな
りかねません。
失敗すること
はチャレンジして
いることです。結
果ではなく、その失敗
から何を学ぶかが問題と
いえます。では、私たち大人
は、子どもの失敗体験をどのように受け
とめていけばよいのでしょうか。



素晴らしい失敗

日本サッカーチームをアテネ五輪へと導いた山本昌邦監督は、自身やまもとまさくにのインタースポーツホームページ(※)に、次のようなメッセージを載せています。

——指導者と選手の両者がテーマとしている課題に対して、選手が挑戦した結果、失敗したとします。これはトレーニングの中で(課題を)意識しているから出てきた失敗であり、両者にとって大きな前進であると思います。そのタイミングをはずさずにほめる事が大切なのです。

「素晴らしい失敗だ、もつともつとトライしてみよう」とアドバイスができれば、選手は恐れる事なく前向きにトレーニングに参加して成長していくことができます。

課題を理解して積極的にチャレンジできるといった段階で、少しずつヒントやアドバイスを送ることでステップアップは確実にできます。ピントをずらさずに失敗をほめるためには選手の学習の段階を十分に観察する力が必要になります。現場で日々これらの経験を積むことで指導者もまた、その指導能力が育つていくことでしょう。

優秀な指導者は選手を成長させることができる人です。選手は失敗を繰り返しながら段階的に成長していきます。失敗の中の

少しの進歩を的確にほめることができる
観察力が優秀な指導者には必要です——



この「失敗をほめる」という山本監督の指摘は、子育てにも共通するのではないだろうか。子どもが失敗したとき、間違いを正そうとして、親はその状況を十分に把握することや子どもの気持ちを察することなく、すぐに叱ったり、安易に手助けをしてしまうことがあります。

子どもが何かを試みて、課題を乗り越えようとしたときの失敗は「素晴らしい失敗」なのです。だからこそ、肯定的な言葉をかけることが大切です。そのためにも、親は子どもを見つめる確かな目を養っておきたいものです。

子どもは、たとえ些細なことでも共感され、努力が認められれば、新たな意欲が生まれ、その失敗体験が生かされるのではないのでしょうか。



子どもの成長を 信じて待つ

各界で活躍する著名人が母校の小学校を訪れ、自分の専門分野を生かした授業を展開するNHKのテレビ番組「課外授業・ようこそ先輩」。

その番組で、「料理愛好家」と自称するシャノン歌手の平野レミさんが、子どもたちに、野菜の素材を生かした料理に挑戦させるという授業を行いました。

子どもたちは、近隣の農家で収穫された葱、大根、白菜、小松菜などを教室に持ち帰り、班ごとにアイデアを凝らし



て、料理を作り上げていきます。成功した班もあれば、失敗してしまい、見るからに美味しくなさそうな料理が出来上がった班もあります。

レミさんは、そうした料理を試食して回りながら、「こんな味付けもできるんだね、いいよ、いい!」「アッハハハ、この料理おもしろーい!」と元気な笑い声をあげて、子どもたちの豊かな発想とチャレンジ精神をほめました。どの子も楽しんで生きているとします。レミさんの持ち味が感じられる、とてにもぎやかな授業でした。

レミさんは、「料理は、失敗するからいろいろなことがわかってきて、そこから考えていける」と言います。

彼女が子どものころ、見よう見まねで



料理をしていると、料理上手じょうずだったお母さんは、「包丁は危ないから、さわっちゃだめよ」などとは言わず、「なんでもしなさい。失敗を恐れずに」と、チャレンジしてみるこの大切さを教えたそうです。

このお母さんの言動には、失敗を肯定的にとらえ、わが子の成長を信じて見守り続けようという姿勢が感じられます。

現在のレミさんが、独創的な発想でいろいろな料理を生み出すことができるのは、小さいころから料理が大好きだったからというだけでなく、このお母さんの態度が大きく影響えいきょうしていると言えるでしょう。

子どもが失敗したとき、あるいは壁かべにぶつかって苦しいとき、大切なのは親の態度です。親から応援おうえんされ、信頼されて

いることを実感している子どもは、失敗を素直に受け入れて、その体験から学び、挫折を乗り越えていく力を身に付けていきます。

子どもの失敗に対して、「だからだめだつて言ったでしょう」などと、その行動を否定したり責めたりしては、子どものやる気を失わせてしまいます。

親は、失敗を否定的にとらえるのではなく、子どもの成長過程にとつて必要な体験であると考えてみることです。そして、子どもの取り組みをまず認め、焦あせらずに、子ども自身が持っている「成長しようとする力」を信じてじつと「待つ」という姿勢も大切なのではないでしょうか。その姿勢は、チャレンジすることに意味を見いだすためにも必要なことです。

子どももの心どう寄り添うか



陽一くんが寝た後、康夫さんと弘子さんは居間でロープウエーと自転車を見比べていました。自転車が出来上がっても嬉しそうでない陽一くんが気にかかっていたのです。

「ねえ、あなた。どうして、ロープウエーじゃなくて自転車にしたの？」

弘子さんが尋ねました。

「陽一の作ったのが、なんか不格好だったし、自転車のほうが作りやすく針金細工に向いていると思ったんだ。それに、失敗して落ち込んでいたから、とにかく宿題を完成させれば自信につながる

と思っただんだ」

「でも、やりすぎたんじゃない？」

「そうだね。ぼくが作りすぎちゃったね」

しばらくして、康夫さんは、陽一くんの作ったロープウエーを手にして言いました。

「よく見ると、このロープウエー、何度もやり直して作っているんだ。陽一なにがんばっていったんだ。ほら」

「ほんとう、少し形がおかしくたって、

どうして『素敵すてきじゃない。がんばって最

後まで作りなさい。やればできるわ

よ』ってあげましてやれなかったのかし

ら」

「明日、陽一の気持ちをちゃんと聞いてみようか」

「そうね。それがいいと思うわ」

康夫さんと弘子さんは、失敗した陽一くんの心にどうすれば寄り添うことができるのかを考え直したようです。

ロープウエーに再挑戦

翌朝、朝食の席で康夫さんは陽一くんに話かけました。

「夕べ、陽一が寝てから考えたんだけど、

あの自転車はお父さんが作りすぎちゃったな」

黙ってうなづく陽一くん。

康夫さんは続けます。

「もう一度、がんばってロープウェイに挑戦して仕上げて持っていくか？ それとも自転車を持っていくか？ 陽一の宿題だからよく考えてみるんだぞ」

陽一くんは、しばらく考えていましたが、康夫さんの目を見て言いました。

「あのね。ぼく、やっぱりロープウェイ

が作りたい。だって大好きなんだ」

「そうか、わかった。昨日はお父さんが作ったけれど、今度は陽一が自分で作り上げるんだぞ」

「ウン！ ぼく、もう一度がんばる」

陽一くんの顔が明るく輝かがやきました。

そんな二人の様子を、弘子さんは笑顔で見守っていました。

